

受賞者からのコメント

対象：医学部 3年

医学部神経内科学講座 助教 齋藤 正樹

「授業を行うにあたって工夫していること」

- 1) 私は学生の頃、筋肉でものを覚えるタイプでした。そこで、講義で手足を動かす場面が入ってしまいます。講義室に入った時（使用前）と出た時（使用后）の学生さんの体型ではなくて、知識やひらめきが、どれだけ変わるか？そこにこだわっています。
- 2) 学生さんが将来、各分野のリーダーになり、後輩や多職種の方々に「知識を伝える」役割を担うときに、「こういう伝え方がある」と感じてもらえるように（空気が凍らないよう心配しつつ）おじさんダジャレを連発しています。おつきあいしてくれる学生さんがいないと成り立たない講義になっています。
- 3) 過去 10 年分の国家試験問題（医師 看護師 理学療法士 作業療法士 言語聴覚士 救命救急士 薬剤師 MSW PSW）の脳血管疾患、（血管性）認知症の設問に、一通り目を通してあります。今後の国家試験の様相を予想しつつ（やりすぎると予備校の先生になってしまいます）、講義では、臨床現場の求める知識とのギャップを埋めるよう意識しています。特に、後になって（臨床の現場で）必要となる知識は強調して、この場で教えます。また、学生さんの将来に期待しつつ、海外・最新の研究・医療の進歩などに触れるようにしています。
- 4) 学生さんの今という時間は貴重です。家に持ち帰って勉強する量を減らすこと。知識は講義室で覚えきって帰ってもらうのが目標です。

「学生への要望・アドバイス等」

みなさんのクラスの雰囲気が大変良かった、そういった印象が残っています。学生さんの熱心さに感激し、こちらもつい力が入りました。聴講してくれた（私をのせてくれた）学生さんに大変感謝しています。

マッチングや大学院入試といった他大学卒業生との競争になる瞬間が、学生さんに、やがてはやってきます。知識を多く持つことは競争だけでなく、新しい発見に近づくために重要です。

臨床の先生方と大学職員の創意と熱意で生まれ変わりつつあるクリクラで、また一緒に勉強しましょう。私たちの後輩である札幌医大生が正しく評価されることはもちろん、競争に負けないよう応援しています。将来、自分の希望する道に進めるよう、講義を活用してください。